

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月14日現在

機関番号：64303

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008年度～2011年度

課題番号：20320065

研究課題名（和文）パプア諸語の比較言語学的研究 - 南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として

研究課題名（英文）Comparative study of Papuan languages - the languages of South Bougainville and East Simbu

研究代表者

大西 正幸 (ONISHI MASAYUKI)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト上級研究員

研究者番号：10299711

研究成果の概要（和文）：

本研究では、パプア諸語のうち、南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象に、それぞれのグループに属する言語の基礎資料を収集し、比較言語学的手法を用いて分析、その下位分類と祖語の再構を目指した。その結果、南ブーゲンヴィル諸語に関しては、6言語のうち4言語の、また東シンブー諸語については、所属する言語すべての、下位分類に関する仮説が建てられる段階となった。

研究成果の概要（英文）：

This research dealt with two genetic groups of Papuan or Non-Austronesian languages, spoken in South Bougainville and East Simbu, respectively, of Papua New Guinea. The project aimed to establish the subgrouping, and reconstruct the sound system of the proto-language, of each group. For this purpose we collected basic lexical and morphological data of the sister languages through fieldwork and analysed them using standard methods of comparative linguistics. After four years of research, we can now hypothesise the subgrouping of four languages (except Buin and Uisai) of South Bougainville and all the languages of East Simbu.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	2,300,000	690,000	2,990,000
総計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：危機・少数言語、パプア諸語、比較言語学、ブーゲンヴィル、シンブー

## 1. 研究開始当初の背景

パプア諸語は、オーストラリア大陸とニューギニア島が一つの大陸をなしていた氷河期に、東南アジアから渡ってきたオーストラロイドによってもたらされた言語の後裔と考えられている。この集団が、その時期にかりに一つの言語を話していたとしても、おそ

らくは4-5万年前に遡るその分岐の年代の深さからみて、現在の諸言語のデータをもとに、比較言語学的に一つの祖語を再構することは不可能である。

パプア諸語は、今日、「トランスニューギニア語族」と呼ばれる大語族と、その以外の多くの小語族に分類されているが、仮定された語族の数すら、23 (Ross 2005)から36以上

(Foley 2000)と、言語学者によって大きな相違がある。一般に、パプア諸語の語族仮説は、祖語の再構と、そこから仮定される音韻変化によって現在の諸言語の反映形を説明するという、厳密に比較言語学的方法をとって立てられたものではない場合が多い。そのような方法論を適用するには、信頼できる言語データがあまりに少ないのである。そのため、語族仮説の大まかな枠組は考慮すべき目安として有用ではあるが、全てをそのまま受け入れることはできない。

以上の認識の上に立ち、本研究の2名の申請者は、それぞれが専門とする、南ブーゲンヴィルと東シンブーの2地域の言語グループを対象に、パプア諸語の歴史的研究にとって今最も必要とされる、ボトムアップのアプローチによる比較言語学的研究を推進することにした。

## 2. 研究の目的

1に述べたように、本研究は、パプア諸語のうち、南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象とした。主な研究目的は次の2点である。

(1) まず、大西(研究代表者)と千田(研究分担者)は、それぞれが専門とする言語グループに属する言語の詳細なデータを、現地調査によって発掘し、正確に記述する。こうして得られたデータを実証的に分析することによって、音韻対応や他の文法現象の対応を見出す。そして、それを手懸りに、それらの言語の下位分類を検証し、祖語の再構を目指す。

(2) また、研究の過程で、大西と千田は、パプア諸語の比較言語学的研究の理論的/方法論的問題点を検討する。特に、①言語のどの語彙/文法要素がより深い系統関係を反映しうるか。②言語特徴のうち、伝播に基づくものと、系統関係に基づくものを、どのように区別するか。等の問題に着目し、両語族のデータ分析に基づいて、一般化をはかる。

## 3. 研究の方法

それぞれの言語グループを専門とする大西(研究代表者)と千田(研究分担者)が、各言語グループの主要な言語や方言の語彙・形態データを、現地調査を通して収集し記述する。また、稲垣(連携研究者)と寺村(連携研究者)の協力のもと、データベースや言語地図を作成し、そのデータの比較言語学的分析を行なう。こうして、それらの言語の下位分類と、祖語の再構を行うとともに、互いのデータ分析を検討し合いながら、パプア諸語の比較言語学的分析に共通する重要課題を抽出、検討する。

## 4. 研究成果

### (下位分類、歴史的再構)

南ブーゲンヴィル諸語に関しては、ナーシオイ語の2方言、ナゴヴィシ語の2方言、バイツィ語、モトゥナ語の2方言の語彙・形態データがかなり揃い、これらの言語の歴史的分岐ははっきり再構できるまでになった。特に、バイツィ語の語彙データが得られ、この言語がナゴヴィシ語とモトゥナ語の中間に位置することがわかったことが大きい。(なお、バイツィ語のより詳細な記述に関しては、2012年度からはじまる基盤研究(C)「バイツィ語—南ブーゲンヴィルの危機に瀕する言語の記述研究」(大西正幸代表、課題番号24520488)に受け継がれる。)また、ナゴヴィシ語に関しては、その方言の地理的分布をGISを用いて可視化する、新たな試みを行うことができた(稲垣・寺村(2011)、雑誌論文②)。今後、この手法を、他の言語・方言地域にも適用したい。なお、南東部のブイン語、ウイサイ語地域での現地調査ができなかったため十分なデータが揃っておらず、これら2言語と残り4言語の関係については、なお今後の調査に待たなければならない。

一方、東シンブー諸語については、所属する言語すべてをほぼ網羅する、語声調の精密な記述を含む質の高い語彙資料が揃い、その歴史的分岐に関する仮説が建てられる段階となった。パプア諸語の1つの言語グループに属する言語・方言に関して、これだけ詳しい音声データが揃った例は稀で、画期的な成果と言える。また、若手研究(B)「ドム語の民族誌的言語資料の調査研究(千田俊太郎代表、課題番号20720107)と連携した、長期にわたるフィールド調査のおかげで、この地域についての詳しい地理的・社会言語学的情報が得られた結果、人の移動や方言境界に関するデータも揃っている。今後はこうした側面についても詳細な分析が行われる予定である。

### (パプア諸語に共通の課題)

パプア諸語の比較言語学的分析に共通する課題としては、超分節的要素(東シンブー諸語の場合は語声調、また南ブーゲンヴィル諸語の場合はアクセントと喉頭化音)の下位分類に果たす役割の大きさを証明できたことが最大の成果である。特に、声調やアクセントは、これまで、伝播によって拡散する傾向が強いと見なされがちだったが、必ずしもそうでないことが証明できた。これらの成果の一部は、大西(2010)(雑誌論文④)や千田(2011)(雑誌論文③)で発表した。

### (今後の展望)

それぞれの言語グループの歴史的再構に

関する、現時点における成果に関しては、大西と千田が、それぞれ英文の論文を準備中である。また、今回のプロジェクトでのフィールド調査を通じて、語彙や形態的なデータだけでなく、談話資料、各言語に関する社会言語学的な資料なども収集でき、多くの新たな知見を得ることができた。これによって、将来的には、ブーゲンヴィル諸語とシンブー諸語のすべての言語の通時的関係を明らかにする端緒が開けたといえる。なお、2012年にモトゥナ語文法が出版された(Onishi (2012)) (図書②)が、今後は、今回の研究成果をより反映した、改訂版の完成を目指したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 大西正幸。「ナーシオイ語民話テキスト」。『地球研言語記述論集』3: 209-243。2011年。査読無。
- ② 稲垣和也・寺村裕史。「GISを用いた方言分布の地理的分析：南ブーゲンヴィルのシベ(ナゴヴィシ)語の方言地図」。『地球研言語記述論集』3: 183-208。2011年。査読無。
- ③ 千田俊太郎。「東シンブー諸語サブグループングに向けて」。『地球研言語記述論集』3: 153-182。2011年。査読無。
- ④ 大西正幸。「モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化」。『地球研言語記述論集』2: 165-194。2010年。査読無。
- ⑤ 稲垣和也。「ナゴヴィシ・シベ語の類別詞」。『地球研言語記述論集』2: 135-164。2010年。査読無。
- ⑥ 千田俊太郎。「ドム語の多義 — 知覚動詞を中心に」。『地球研言語記述論集』1: 95-121。2009年。査読無。
- ⑦ Onishi, M., S. Tida, R. Ono, Y. Negishi, K. Tadokoro and T. Furusawa. Review on: Pawley, A., R. Attenborough, J. Golson, and R. Hide (eds.). 2005. *Papuan Pasts: Cultural, Linguistics, and Biological Histories of Papuan-speaking People*. 2009年。査読無。

[学会発表] (計8件)

- ① Tida, Syuntaro. 'Multi-word lexical items in Dom.' Visiting Lecture, Adam Mickiewicz University, Poznan, Poland. 2012年2月6日。
- ② Tida, Syuntaro. 'Tonal evidence for subgrouping the Simbu dialects.' Conference on History, Contact and Classification of Papuan Languages, VU University Amsterdam, Holland. 2012年2月3日。
- ③ Onishi, Masayuki. 'Documentation of

endangered languages and cultures.' Visiting Lecture, North Bengal University, Bagdogra, Jalpaiguri, West Bengal, India. 2011年9月22日。

- ④ Onishi, Masayuki. 'Bougainville (Papua New Guinea): The struggle for keeping traditional languages and cultures alive in the globalising world.' Chotro 3, Toshali View, Chail, Uttar Pradesh, India. 2010年9月14日。
- ⑤ 千田俊太郎。「ドム語(パプア・ニューギニア)における五段階」。国立国語研究所プロジェクト「節連接へのモーダルの・発話行為的な制限に関する研究」研究会。国立国語研究所。2010年7月25日。
- ⑥ 千田俊太郎。「ドム語と地理について」。2008年度日本オセアニア学会関西地区研究例会。国立民族学博物館。2009年1月31日。
- ⑦ 大西正幸。「言語地図のさまざまな可能性」。沖縄言語研究センター第31回年次総会。琉球大学。2008年7月6日。
- ⑧ Tida, Syuntaro. 'Some issues in reconstructing Proto-Simbu tones.' 2<sup>nd</sup> Sydney Papuanists' Workshop. The University of Sydney. 2008年6月28日。

[図書] (計4件)

- ① ニコラス・エヴァンズ著、長田俊樹・大西正幸・森若葉訳。『危機言語—言語の消滅によってわれわれは何を失うのか』。京大学術出版会。2012年出版予定。
- ② Onishi, Masayuki. *A Grammar of Motuna (OGFAUS 09)*. Lincom Europa, Munich, Germany. 全 xxiii + 565ページ。2012年。査読有。
- ③ 大西正幸。「言語の絶滅とは何か?」『環境学大事典』、186-187ページ。2010年。査読有。
- ④ 千田俊太郎。「トクピシン」(梶茂樹、中島由美、林徹編。『事典 世界のことば141』、150-153ページ。2009年。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

大西 正幸 (ONISHI MASAYUKI)  
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト上級研究員  
研究者番号: 10299711

(2)研究分担者

千田 俊太郎 (TIDA SYUNTARO)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：90464213

(3)連携研究者

寺村 裕史 (TERAMURA HIROFUMI)

国際日本文化研究センター・研究部・機関研究員

研究者番号：10455230

稲垣 和也 (INAGAKI KAZUYA)

京都大学・大学院文学研究科・教務補佐員

研究者番号：50559648

追記：2011年度より日本学術振興会特別研究員となったため、連携研究者から研究協力者へ変更した。